第10回 小さな展覧会

京都発掘'92

1992.8.15～8.29

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

ごあいさつ

京都府埋蔵文化財調査研究センターが毎年行っております『小さな展覧会』も、今年で10回目を迎えることができました。この展覧会の目的は、前年度に京都府内で行われた発掘調査の成果や出土遺物を広く一般の方々に紹介し、合わせて埋蔵文化財への関心や文化財保護への理解を深めていただくことにあります。そのためにも、皆様によりわかりやすく親しみやすい展示をこころがけていくつもりであります。

当調査研究センターでは、1991年度に41件の発掘調査を行いましたが、今回の展覧会では、そのうち注目された16件の発掘調査をとりあげ、府内の各関係機関の発掘成果14件とあわせて展示しています。

今回の展示にご協力をいただいた各関係機関をはじめ、協賛をいただいた向日市文化資料館ならびに後援をいただいた京都府教育委員会に感謝いたします。

1992年８月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福山敏男

凡　　例

1．本図録は、1992年８月15日～８月29日の第10回小さな展覧会「京都発掘'92」の展示図録である。

2．展示品は、京都府埋蔵文化財調査研究センター及び各機関が主として1991年度に発掘調査を行った遺跡・遺物を対象とした。

3．収録した写真は、京都府埋蔵文化財調査研究センターが撮影したもののほか、次の機関・個人から提供をうけた(順不同、敬称略)。
網野町教育委員会・宮津市教育委員会・舞鶴市教育委員会・綾部市教育委員会・京都文化博物館・㈶向日市埋蔵文化財センター・長岡京市教育委員会・㈶長岡京市埋蔵文化財センター・八幡市教育委員会・宇治市教育委員会・城陽市教育委員会・京都府教育委員会

4．資料調査、図録作成、展示品借用に当たっては、上記の写真提供者のほか、各関係機関・個人の方々からご指導、ご協力を受けた。

5．本図録は、高橋美久二(山城郷土資料館)、平良泰久・田中　彰(写真)・村田照久・辻本和美(京都府埋蔵文化財調査研究センター)が分担して作成し、辻本がまとめた。

表紙カット：硯につけられた羊か竜の頭の飾り　樋ノ口遺跡　　► 樋ノ口遺跡と三彩小壺

目　次

離湖古墳……1
こくばら野遺跡……2
堤谷窯跡群……3
通り古墳群……4
蔵ヶ崎遺跡……5
高田山古墳群・経塚……6
青野西遺跡……8
小谷17号墳……9
池尻遺跡……10
平安京跡……11
聚楽第跡……12
長岡京跡左京第265・277次……14
長岡京跡右京第365次……16
勝龍寺城跡……17
下植野南遺跡……18
百々遺跡……20
旦椋遺跡……21
横道遺跡……22
瀬後谷窯跡群……23
西山古墓……24
樋ノ口遺跡……26
復原された瓦谷古墳のヨロイとカブト……28
珍品あれこれ……29
その他注目の遺跡……30
展示品リスト……32

図の番号は、目次の頁に対応。

離湖古墳（はなれこ）（網野町教育委員会）

5世紀
網野町小浜

「王者の棺」に葬られた丹後の豪族

離湖古墳は、日本海側最大の前方後円墳である網野銚子山（ちょうしやま）古墳近くの、離湖という小さな湖のかたわらにある。一昨年、この古墳から、長持形石棺（ながもちがたせっかん）の底石がみつかった。長さ約2.5m、幅1.1～0.9mで、短辺の両側に2個の縄掛突起（なわかけとっき）をもつのは、全国で初めてである。石棺の北側から木棺の埋葬施設がみつかった。棺内から銅釧（くしろ）・鏡をはじめ多彩な遺物が出土した。木棺は5世紀前半、石棺は中頃の時期に属し、それぞれの副葬品の特徴から、女性と武人の男性像がうかぶ。古墳の規模・埴輪・石棺の形からみて、被葬者は丹後の王の一族に繋がる人物であろう。

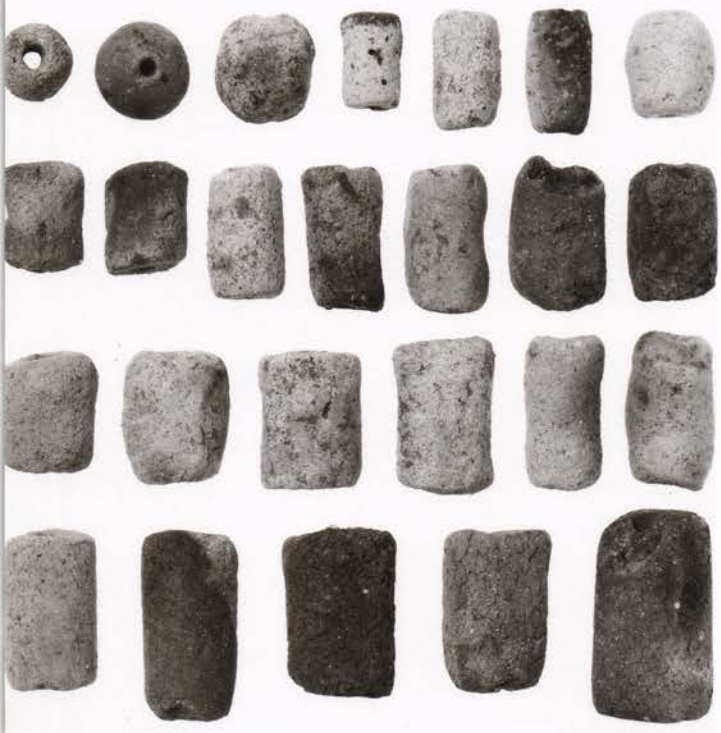
◀ 銅と石の腕輪

▶ 連なった首飾りと銅鏡

▼ ならんでみつかった石棺と木棺
手前が石棺の底石

こくばら野遺跡（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

6～8世紀
久美浜町甲山



海の幸でくらす砂丘の村

久美浜湾は、小天橋と呼ばれる砂嘴（潮流や風の働きで海中に細長く延びた砂の堆積）によって形成された内海で、海岸の砂丘上には各時代の遺跡が数多く立地する。こくばら野遺跡もその一つで、古墳時代から奈良時代にかけての村跡である。この村では、住居の形が、奈良時代の初め頃を境にして、竪穴式住居から掘立柱建物へと大きく移り変わるようすが明らかになった。また、タコ壺や魚網の錘に使う多量の土錘がみつかり、久美浜湾での魚取りを日々の糧としていた村人の暮らしぶりをうかがうことができる。

◀ 土で作った大小の魚網の錘

▼ 円形の柱穴と方形の住居跡

堤谷窯跡群（つつみだに）（京都府教育委員会）

7世紀
久美浜町堤谷

丹後最古の瓦窯跡

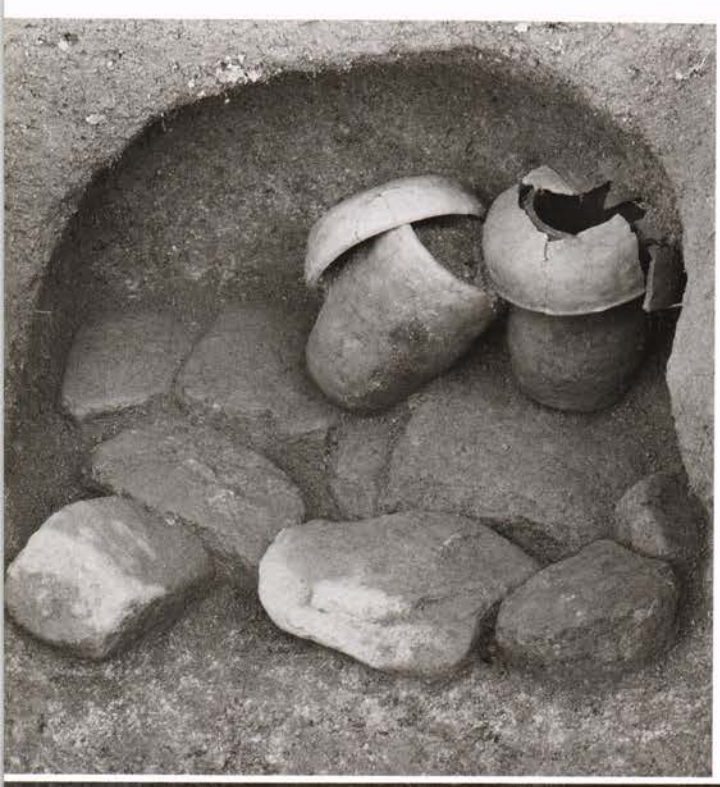
飛鳥時代の終わり頃から、全国各地で数多くの寺院が建てられていくが、丹後では、わずかに俵野（たわらの）廃寺と国分寺跡が知られるのみである。

昨年、久美浜町の山間部で工事中、偶然2基の窯跡がみつかった。1基は須恵器、もう1基は瓦を焼く窯であった。瓦窯は、全長5.7mの半地下式で、床には段をもつ。ここからは、単弁蓮華文（れんげもん）軒丸瓦、素文軒平瓦、放射状の幾何学文の回りに蓮弁を入れた鬼瓦が出土した。軒丸瓦は、近くでは兵庫県豊岡市にある寺跡のものと良く似ているが、丹後では、これまでみつかったことのないものだ。この瓦を葺いた寺跡はどこかにあるはず。幻の寺院跡はどこに眠る。

▼ 放射状の文様で飾られた鬼瓦
► 丹後最古の軒丸瓦
▼ 窯の焚き口にのこる瓦

通(とお)り古墳群 (京都府埋蔵文化財調査研究センター)

4～14世紀
大宮町口大野



丹後大地震のツメ跡を残す古墳

今から65年前の昭和２年、丹後地域を襲った大地震は大きな被害をもたらした。被害は人家にとどまらず古墳にもそのツメ跡を残している。

通り古墳群(円墳２基・方墳１基)は、４世紀の終りから５世紀前半に築かれ、全て木棺を直接墓穴に埋葬する。中から、小刀や耳飾り・土器が少量みつかった。３号墳でみつかった木棺は、途中で斜めに断ち切られ、地震の激しさを物語る。

１号墳の墳丘からは、横穴を掘り川原石で蓋をした経塚(きょうづか)が２ヶ所みつかった。末法の世にあたり先祖の眠る古墳を再利用したものであろう。

◀ 横穴に納められた経筒

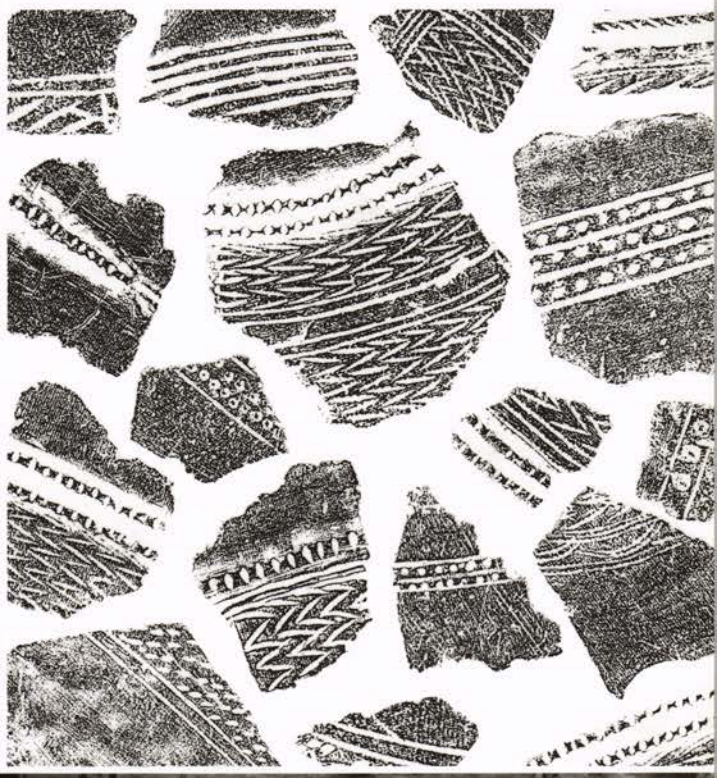
▼ 地震でななめにずれた木棺の跡

蔵ヶ崎遺跡（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

前３～８世紀
加悦町明石

丹後最古の水田跡

蔵ヶ崎遺跡は、これまでの調査で、弥生前期の流路跡がみつかっていたが、今回、中期の溝跡から、水田の用排水路と思われる、矢板や杭を用いた護岸施設がみつかった。また、弥生前期の土層の土壌分析を行った結果、イネのプラント・オパール(微化石)がみつかり、予想どおりこの場所に水田が存在したことが確実になった。流路内から多量に出土した弥生前期の壺には、綾杉文など日本海沿岸の初期稲作遺跡に多く見られる文様をもつ。水稲耕作の伝播とともに、生活を飾るデザインももたらされたものであろう。



► 丹後最古の文様をもつ弥生土器

▼ みごとに残る水路の矢板　前１世紀

高田山古墳群・経塚（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

5～13世紀
福知山市庵我

方墳と経塚、未来永劫への願いは同じ

中丹地域は、府内でも方墳が多い。高田山古墳群もその一つで、1号墳は一辺25m、2号墳は南北22m、東西19m。この地域では4番目と8番目の大きさをもつ。今回、2号墳を発掘すると、墳頂部から埋葬施設の木棺跡がみつかり、内外から鉄製の武器類や須恵器たる形瓶等の副葬品が出土した。築造は5世紀前半。在地有力者の奥津城である。

墳丘からは、鎌倉時代の墓と経塚2基もみつかった。経塚は、穴を掘って埋納し、その上を石で覆っていた。出土した瓦質の蓋付きの外容器には、木製と銅製の蓋、漆の膜が折り重な

◀ みつかった木棺の跡
▲ たる形をした須恵器の水筒
▼ 方形の墳丘をもつ2号墳

るように入っており、中に漆を塗った木か竹製の経筒を入れていたようだ。もう一方の経塚からは、中国製青白磁の蓋付きの小壺と小皿が出土した。小壺は、写実的な花の文様、小皿には、花びらの文様が描かれており、３点セットで、しかもこれだけ完全な形で出土したのは我国で初めてである。

経塚　釈迦入滅の2000年後に仏法が衰え天災や地変が相次いで起こる末法の世になるという思想が11世紀頃から人々の間に流行した。このため、やがて民衆を救済するという弥勒菩薩が世に現われる時まで、経典が失われてしまうことを恐れ、地下に埋めて伝えようとした。

▼ 穴に納め石でおおった経塚
► 花柄の中国製青白磁の小壺と皿
▼ お経を納めたふた付きの土製容器

青野西遺跡（あおのにし）（綾部市教育委員会）

前２～13世紀
綾部市青野

弥生の墓にそえられた水差し壺

JR綾部（あやべ）駅の北東から由良川の堤防にかけて広がる平地には、数多くの遺跡が立地する。青野西遺跡もその一つで、弥生から中世に及ぶ大規模な村跡である。昨年の調査では、弥生中期の方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）が10基以上もみつかり、ここが墓地であったことがわかった。いずれも、幅１～1.5m、深さ１mの溝を巡らす一辺10m程の長方形の墳墓である。溝は、全周せず、四隅や一部を掘り残し陸橋とする。溝の中から、壺や高杯がほぼ完全な形で出土した。壺には、なぜか把手の付いた水差しの形のものが多い。死者への供養のため墓上に供えられたものか。

◀ 墓に供えられた水差し形の弥生土器

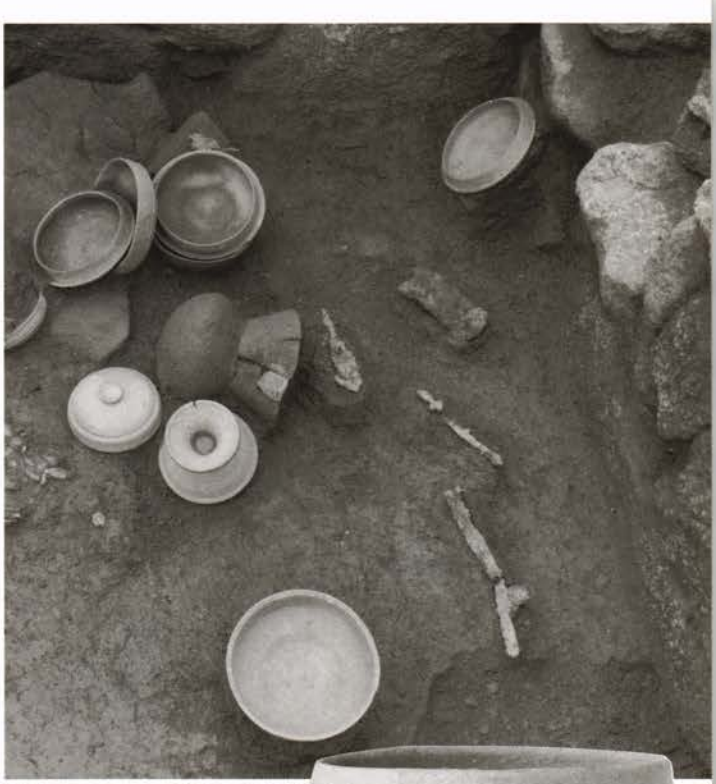
▼ 空からみた弥生時代の墓地

小谷17号墳（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

6世紀
八木町本郷

丹波最古級の横穴式石室

石材の散乱する調査前の姿とは裏腹に、閉塞石が完全に残り、石室内から、鉄製の武器・馬具類や6世紀前半頃の須恵器が多数出土した。死者を埋葬する玄室は、長さ2.1m、幅1.9mと正方形に近く、玄室への通路である羨道は、奥壁に向かって右側に片寄せ、幅0.7mと狭く短い。この様な石室の平面形は、そのまま初期の横穴式石室の特徴と一致する。4世紀末頃に北九州に伝わった横穴式石室は、5世紀には近畿地方におよび、やがて6世紀には全国に広まった。亀岡盆地では、拝田16号墳や医王谷3号墳の石室が古く、この地の豪族が最新式の埋葬方法をいち早く取り入れたことがわかる。



◀ 石室内でみつかった副葬品
▶ 台にすかしの入った須恵器の高杯
▼ 正方形に近い玄室をもつ横穴式石室

池尻遺跡（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

前3～8世紀
亀岡市馬路町

奈良時代の漆製作工房跡

亀岡市は近年、都市化の波が急激に広がりつつあるが、馬路町一帯は、まだまだのどかな田園風景を残す。その一角にある池尻遺跡は、弥生前期から奈良時代にかけての村跡である。ここからは、台付長頸壺と呼ばれる奈良時代の須恵器が多量に出土した。良く見ると内側に漆がべっとりと付着し、漆を入れる容器に使用されたらしい。10世紀に書かれた『延喜式』には、丹波国の特産品として漆があげられている。近くの屋賀には、平安時代に国府の役所があったと伝えられており、この村でも古くから漆を生産していたのかもしれない。

▼ 漆の採集風景　『日本山海名物図会』から
◀ 内面に漆のついた土器
▼ 漆を入れた土器

平安京跡（京都文化博物館）

17世紀
京都市上京区

京の町中でみつかった和鏡の鋳造工房跡

京の町の地下は、文化財の宝庫である。1000年の都市を支えた町衆の生活が眠っている。京の中心中京区から、江戸時代初期の和鏡の鋳造工房跡がみつかった。炭や灰が一杯詰まった大きな穴から、鏡の鋳型や銅の地金を溶かすルツボ、フイゴの羽口（送風管）が出土した。鋳型は、土型という格子を刻んだ素焼きの土盤で、この上にキメの細かい真土を貼り付け鏡の背になる文様を描く。鋳込むと真土が取れ、残らないのが普通だが、桐の文様を残す珍しいものもある。京都の伝統産業は、染織品のような軽産業が中心と思われがちだが、江戸初期の京都では、金属関係の産業も盛んであった。

► 鏡の鋳型とルツボと羽口

▼ みつかった和鏡の鋳造工房跡

聚楽第跡（じゅらくだい）（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

16世紀
京都市上京区

廿まい
十九まい
十まい

秀吉栄華の跡から金箔瓦がザクザク

ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは、その著書『日本史』の中で、聚楽第を、安土城や大坂城よりも、はるかに豪華であったと記している。聚楽第は、天下人豊臣秀吉が関白公邸として、その富と権勢を誇るかのように贅（ぜい）を尽くして京に築いた城郭式邸宅である。しかし、着工後わずか9年半で消滅したため全容は謎につつまれたままである。今回みつけた堀跡は、幅15m以上、深さは6m以上に達し、その壮大さの一部を垣間みせた。堀内からは、金箔を貼った軒瓦や飾り瓦が800点余りも出土。まさにキング・オブ・ジパングの世界がそこにある。

◀ 数字とひらがなが書かれた瓦

▼ 金箔瓦　表面に漆を塗って金箔を貼る

聚楽第略年表

1586（天正14）工事着手。

1587（天正15）完成。秀吉大坂城から移る。

1588（天正16）後陽成天皇行幸。

1591（天正19）甥の秀次に関白を譲り、秀吉大閤となる。

1595（文録４）秀次自殺させられる。聚楽第を壊す。

▶ **聚楽第図屏風**　櫻井成廣著『豊臣秀吉の居城』から

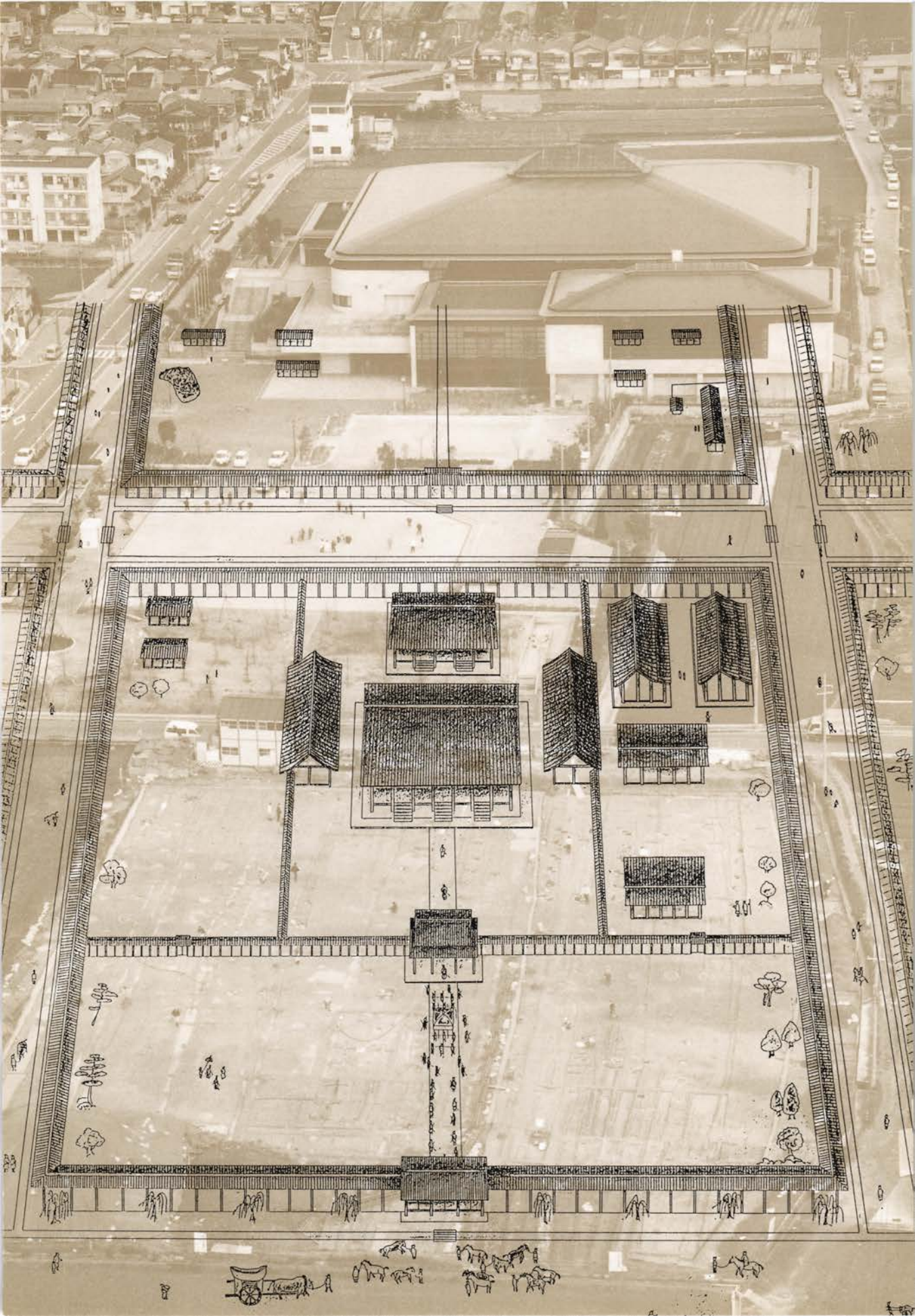
▼ **堀を埋める土砂**

長岡京跡左京第265・277次 （向日市埋蔵文化財センター） 8世紀 向日市鶏冠井町

大規模な建物群－桓武天皇の東院跡か

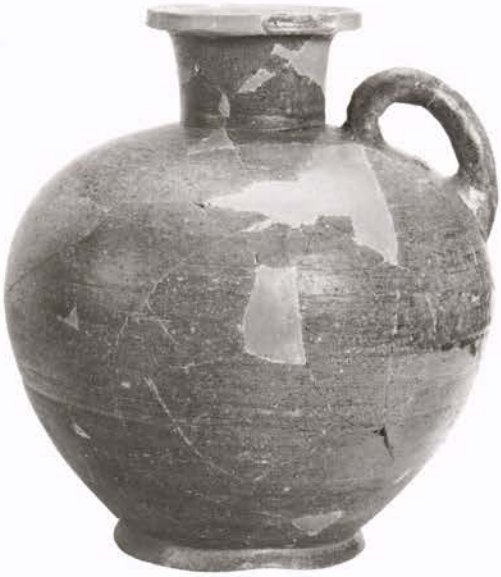
左京南一条二坊十二町にあたる部分の調査で、宮内での天皇の住まいである内裏に匹敵する規模の正殿、後殿、東西両脇殿とそれらを取り囲む南門や築地塀、板塀などの建物群がみつかった。中心の建物である正殿は東西棟の建物で、身舎の梁間が3間、桁行が7間あり、南北両側に庇があって、全体の大きさが東西21m、南北18mもある規模の大きな宮殿の正殿のような建物である。また、南門も八脚形式の格式の高い門であった。この位置が内裏の真東にあたることなどから、桓武天皇が延暦12(793)年から平安京へ移るまで住まいした東院跡であろうと推定されている。

◄ 東脇殿跡
▼ 正殿跡
► 全景と復原イメージ



長岡京跡右京第365次（長岡京市埋蔵文化財センター）

8世紀
長岡京市開田

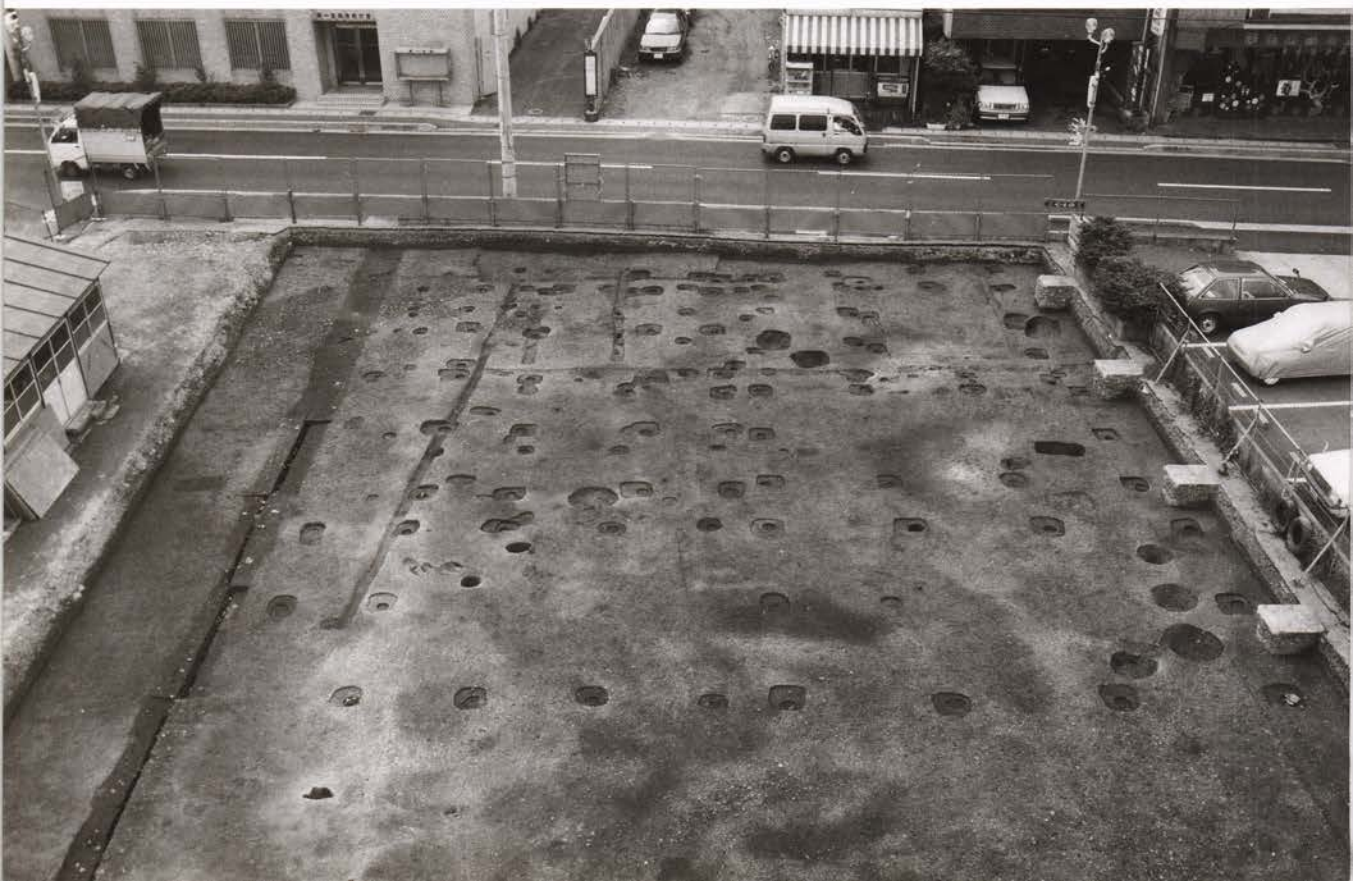


大路の交差点と周辺の家並み

五条大路と西一坊大路との交差点と、五条大路の北側の五条二坊四町の宅地および、その南側の六条二坊一町の宅地の一部が発掘調査された。五条大路北側の宅地では、立派な井戸と簡単な建物跡が、また、南側の宅地では、貯蔵用の大甕を床に並べた倉庫群が軒を接するように並ぶ。溝の中から「角家」と書かれた土器や灰釉陶器の壺などが出土した。この場所は、長岡京究明に取り組んで来られた中山修一氏が、長岡京の宅地割りである条坊の制度が、条里地割り（1町＝約109m）ではなく、平安京と同じ地割り（1町＝約135m）であることを発見される発端になった記念的な土地である。

◀ 灰釉陶器の把手付きの壺

▼ 五条大路の南の宅地の倉庫群



勝龍寺城跡（しょうりゅうじじょう）（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

13～16世紀
長岡京市勝竜寺

勝龍寺城以前の集落跡

ガラシャ夫人で有名な勝龍寺城は、14世紀（南北朝時代）に細川氏の居城として築城され、山崎の合戦後廃城になるまで、幾度となく歴史の舞台に登場する。現在、勝竜寺城跡公園として整備され、市民に親しまれている。この公園前の道路改修に伴う調査で、城の築城時期より古い、鎌倉時代の建物跡や柵列跡がみつかった。また、一角からは、瓦器（かき）の椀・羽釜（はがま）、土師皿、須恵器鉢などが多量に投げすてられたゴミ穴が出てきた。これらの土器は、日常使われていたもので、当時の人々の暮らしぶりがうかがえる。

► 調査地と勝竜寺城跡公園

▼ 日常生活で使われたナベ・カマと食器

下植野南遺跡（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

6～13世紀
大山崎町円明寺

古墳時代の水辺のまつり

普段はめぐみを与えてくれる川も、一端、洪水ともなれば大きな被害をもたらす。治水技術の未熟な古代にあってはなおさらであった。乙訓地域の南部を流れる小泉川の岸辺から、古墳時代のまつり場の跡がみつかった。地面を少し掘り凹め、完形の須恵器や土師器を据え置いたもので、穴の中や周りには、多量の滑石製臼玉がばらまかれていた。土器の底には穴が開け

◀ 小さな銅鏡と滑石製の臼玉

▼ まつりで使われた土器

られているものがあり、実用品でないことがわかる。この近くからは、銅製の小さな鏡も出土しており、川の神への捧げものと思われる。

調査地からは、平安時代の石敷の道路跡が出てきた。この場所の近くには、平安京からまっすぐに山崎にのびる久我畷（こがなわて）という道路が今も残っている。今回みつかった道路跡が、どこに通じているのか解明がまたれる。

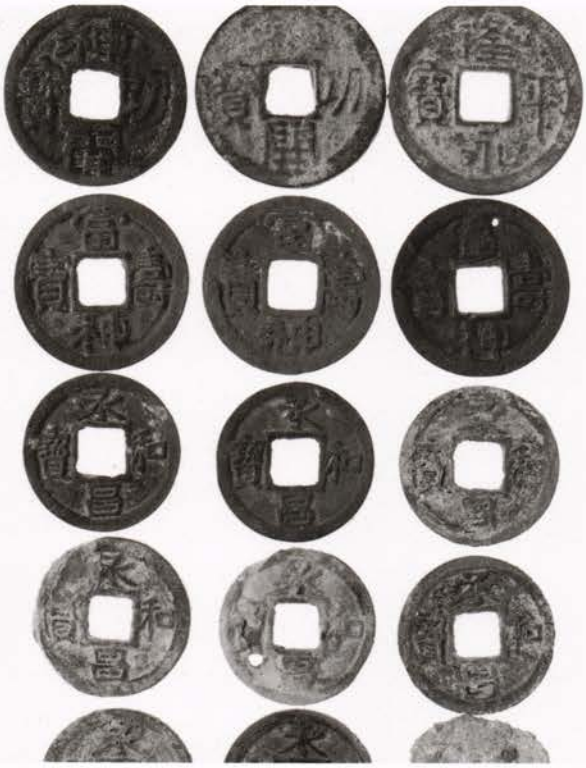
► 平安時代の石敷きの道路跡

▲ 水辺でまつりが行われた川跡

▼ みつかったまつり場の跡
手前の竹クシは臼玉がみつかった位置

百々遺跡（どど）（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

9～10世紀
大山崎町円明寺



平安時代の幹線道路、西国街道（さいごくかいどう）

名神高速道路は、文字通り日本の大動脈である。この拡幅工事に伴う調査地から、古代のハイウエーともいうべき西国街道（山陽道）の道路側溝跡がみつかった。溝の幅は、５ｍ近くもある広いもので、現在の西国街道と並行して走る。溝は、平安時代に掘られ、時代が新しくなるにしたがって幅が狭くなっていくようすがわかる。溝の西側からは、掘立柱建物跡や大きな井戸跡がみつかった。建物の方向は、西国街道と一致する。井戸の中や溝からは、たくさんの銭貨や白磁四耳壺等の高級品が出土しており、街道沿いのにぎわいぶりが想像される。

◀ 古代のお金　上二段は日本製、その下は中国製

▼ 現在の西国街道にそって走る溝跡

旦椋遺跡（宇治市教育委員会）

6～8世紀
宇治市大久保町

古代豪族栗隈氏の本拠地の古墳と集落

式内社旦椋神社（栗隈天神といわれていた）のすぐ南側の発掘調査で、6世紀後半の古墳2基と7世紀前半～8世紀の集落跡などがみつかり、多量の土器などが出土した。古墳は、径20mの円墳と一辺10mの方墳で規模の小さいものであった。盛土のほとんどと埋葬施設は削られて残っていなかったが、堀の中から多量の土器類が出土した。円墳の堀の中からは、円筒埴輪を利用した棺もみつかった。これまで知られていなかった6世紀代の古墳群の一部で、5世紀代に巨大な古墳が築かれた久津川古墳群に引き続いて営まれたことがわかった。

► 堀をめぐらす古墳と住居跡

▼ 古墳の堀からみつかった小型の埴輪棺

横道遺跡（城陽市教育委員会）

5世紀
城陽市平川

巨大古墳周辺の埴輪棺群

山城最大の前方後円墳である久津川車塚古墳の南東で3基の埴輪棺がみつかった。これまでにみつかったものと合わせ8基になる。埴輪棺は、円筒埴輪などを再利用して棺にしたもので、古墳の周囲などに身分の低い人を葬った棺である。今回みつかった埴輪棺のうち3号棺は、朝顔形円筒埴輪の下部を欠いたものに、やや径の小さい円筒埴輪をはめ込んで、全長148cmの棺にしていた。棺の両端やつなぎ目は、埴輪片や土師器の甕の破片などでふさいであった。朝顔形埴輪は久津川車塚古墳のものを利用しているが、円筒埴輪は別の古墳のもののようである。

◀ 埴輪棺に再利用された朝顔形埴輪

▼ 埴輪を再利用して組み合わせた埴輪棺

瀬後谷窯跡群（せごだに）（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

8世紀
木津町市坂

緑釉（りょくゆう）の瓦塔（がとう）を焼いた登窯

京都と奈良にまたがる平城山（ならやま）丘陵には、平城京や寺院の屋根瓦を焼いた窯が数多く築かれた。瀬後谷瓦窯は、5基の窯跡からなり、平城宮創建期の瓦や土器を焼いたことがわかっている。窯は、山腹をトンネル式に掘り込んで作り、瓦を焼く床には瓦で階段が付けられていた。ここでは瓦や土器のほか、瓦塔を焼いていた。瓦塔は、木造の塔を忠実に模したミニチュアの土製の塔で、これまでに全国で100例近くみつかっているが、多くは平安時代に入ってからのもので、奈良時代のものは少ない。この瓦塔には、表面に緑釉のうわ薬が施されており、年代のわかる例としては、日本最古の緑釉瓦塔である。寺か貴族の特別注文品であろう。

► 緑釉のかかった瓦塔
屋根軒回りのコーナー部分

▲ 埼玉県東山（ひがしやま）遺跡出土の瓦塔
飛鳥資料館編『小建築の世界』図録から

▼ みつかった窯跡群

西山古墓（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

8～9世紀
木津町市坂

貴族の墓と二枚の鉄板（墓誌）

縦31㎝、横21㎝の鉄板が、二枚重なって小さな穴から出土した。この鉄板が、ただの鉄板でないことがわかったのは、そのかたわらから立派な木棺墓がみつかったからである。棺材は腐ってなくなっていたが、鉄釘や木目の跡から、棺を直接墓穴に収めずに、槨という一回り大きい部屋に安置されていたことがわかった。底には、漆で塗り固めた冠が残っていた。このような冠をかぶれるのは、奈良時代では、貴族だけである。鉄板は墓誌で、名前や経歴が書かれていた可能性がある。だが、残念ながらサビが進み字は見えない。墓の主人公は誰か、永遠の謎として残った。

◀ 重なった二枚の鉄板（墓誌）
▼ 棺の中からみつかった漆塗りの冠
▶ 木槨と木棺跡　左上の穴から鉄板がみつかった

樋ノ口遺跡（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

8世紀
木津町・精華町

離宮か？寺院跡か？なぞは深まる

調査のきっかけは、田んぼの畔道に捨てられた瓦片であった。ここから、100点余りの二彩・三彩陶器が出土するとは誰が予想できたか。

樋ノ口遺跡は、低丘陵から張り出した細長い台地上にあり、大阪や奈良に通じる交通の要衝に位置する。調査では、築地塀の雨落ち溝や掘立柱の建物跡がみつかった。ここからは、軒瓦をはじめとする多量の瓦類、土器類のほか、二彩・三彩・緑釉・灰釉などの高級陶器類が多量に出土した。中でも、二彩の薬壺の蓋は、日本

◀ **軒丸瓦**　平城宮式瓦で、右下側は花弁外側の文様を作らないめづらしいもの

▼ **柱の根が残る建物跡、門か楼閣？**

最大。羊か竜の頭をかたどった飾りを持つ硯（すずり）は珍品である。軒瓦のほとんどは、平城宮で使われたものと同じであるが、この遺跡独自のものもある。また、普通、宮殿や官寺以外では使われない二彩の瓦もあった。

問題は、この遺跡の性格である。調査担当者は離宮跡説を主張する。一方、京都大学教授で京都府埋蔵文化財調査研究センターの理事でもある足利健亮（あしかがけんりょう）氏は寺跡説を唱える。四つに組んで、両者、当分譲る気配はない。

► 空からみた遺跡　二筋の溝の間に築地が走る

▼ 二彩・三彩・緑釉のうわ薬のかかった陶器と、羊か竜の頭をかたどった飾りを付ける硯

復原された瓦谷（かわらだに）古墳のヨロイとカブト

瓦谷古墳（木津町）

4世紀に築造された、直径30mの円墳。一昨年に行った京都府埋蔵文化財調査研究センターの調査で、木棺と粘土槨の埋葬施設がみつかり、鏡・玉類・鉄製武器・工具などの副葬品が出土した。

◀ 復原されたヨロイとカブト
バラバラになっていたものを、山城郷土資料館で復原した。カブトは、うろこ形の鉄板を、ヨロイは、カルタ形の鉄板を革ひもでとじ合わせたもの。復原されたものでは、日本最古。

▶ 瓦谷古墳の墳丘上に立てならべられていた日本最大級のきぬがさ形埴輪　高さ96cm

珍品あれこれ

◀ 黒耀石（こくようせき）を加工して作ったナイフ
宇治市二子塚古墳　2万年前

◀ 土器の口を打ち欠いた埋葬用の枕
久美浜町堤谷古墳群　5世紀

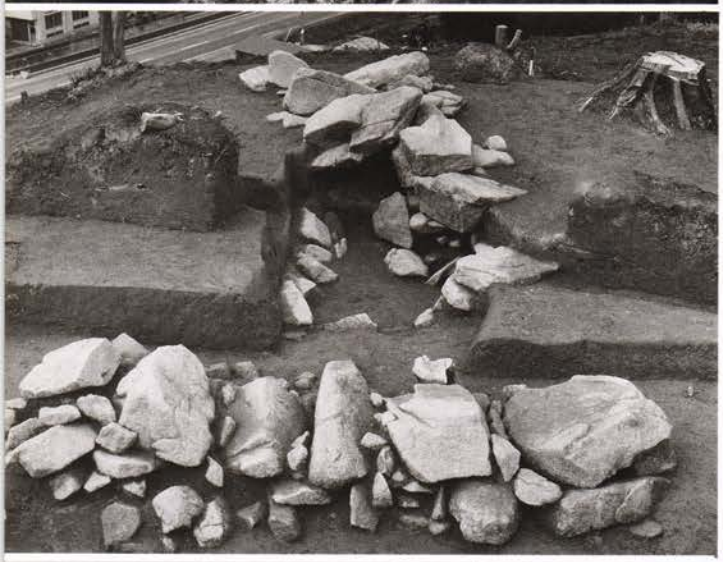
▼ 動物のひづめ形の台をもつ硯
向日市長岡宮跡第259次　8世紀

▶ 把手（とって）の付いた舟形の木製容器
弥栄町遠所遺跡群　6世紀

その他注目の遺跡

遠所遺跡群（弥栄町）

昭和62年以来、継続して行っているもので、昨年の調査でも、製鉄関連遺構をはじめ、5～6世紀の古墳・住居跡群・須恵器窯跡・流路跡等、各時期のさまざまな遺構や遺物がみつかった。谷の入り口部の調査地区では、製鉄のようすがうかがえる鍛冶炉や砂鉄を入れた穴がみつかった。



霧ケ鼻古墳群（宮津市・野田川町）

宮津市と野田川町とを分ける丘陵上に分布する4～6世紀にかけての古墳群である。古墳の埋葬施設は、木棺直葬と横穴式石室とがあり、石室墳は、おおむね6世紀前半のものである。昨年調査した、10号墳では、割り石を利用した小型の竪穴式石室と横穴式石室が、T字状に配置された形でみつかった。

田辺城跡（舞鶴市）

戦国末期の天正13(1585)年に細川氏により築かれた平城で、明治4(1871)年に廃藩置県により廃城になるまで、京極・牧野氏の居城となった。昨年の調査で、残りのよい本丸の石垣や隅櫓の跡がみつかった。石垣は、穴太積みの技法を用いた天正当時のものである。城跡一帯は、舞鶴公園として整備され、出土品の一部も展示されている。

天若遺跡（日吉町）

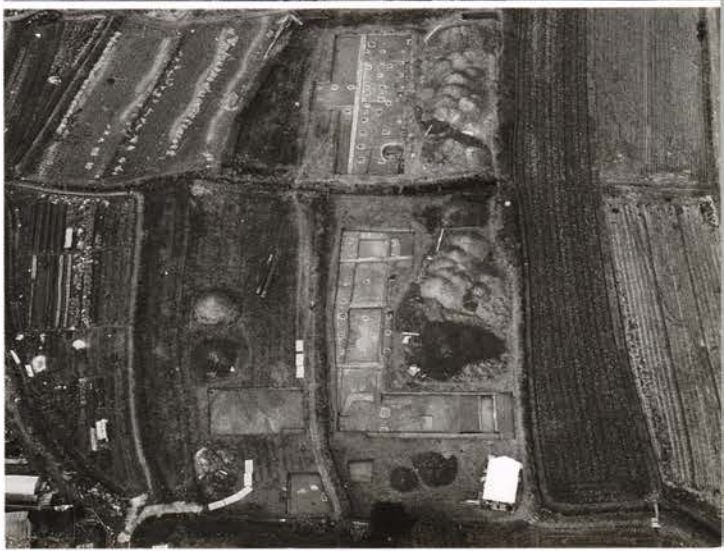
天若遺跡は、これまでの調査で、6世紀から8世紀にかけての村跡であることがわかった。昨年度の調査では、26基の6世紀代の竪穴式住居跡がみつかった。住居跡は、いずれも方形で、壁際にかまどをもつ。一辺が5m前後のものが多いが、やや大型のものも混じる。山間部の遺跡で、これほどまとまって出土した例は珍しい。

平野山瓦窯跡（八幡市）

八幡市と大阪府枚方市にまたがって所在する、摂津四天王寺の創建期の瓦を生産した7世紀前半(飛鳥時代前期)の瓦窯跡で、過去の調査で7基の窯が確認されている。昨年の調査で、さらに2基みつかり合わせて9基となった。調査した8号窯跡は、残りは悪いが、瓦以外に須恵器も同時に焼いていたことがわかった。

恭仁宮跡（加茂町）

恭仁宮跡の調査は、京都府が継続して行っている。一昨年は、朝堂院の西南コーナーがみつかり、東南の調査結果と合わせ、ほぼ朝堂院全体の規模が明らかになった。また、昨年の調査では、宮の東限大垣と思われる塀跡がみつかるなど、恭仁宮跡の調査がはじまって以来の画期的な発見が続いた。



展示品リスト

遺跡名	遺物名	点数	時代	保管者
離湖古墳	石釧	1	5世紀	網野町教育委員会
	銅釧	2	〃	〃
	鉄矛	1	〃	〃
	鉄刀	1	〃	〃
	玉類	一括	〃	〃
こくばら野遺跡	土錘	60	6～8世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	蛸壺	1	〃	〃
堤谷窯跡群	軒丸瓦	2	7世紀	京都府教育委員会
	軒平瓦	1	〃	〃
	熨斗瓦	1	〃	〃
	角切り瓦	1	〃	〃
	鬼板	1	〃	〃
	筒状土製品	1	〃	〃
堤谷古墳群	鼓形器台	1	4世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
遠所遺跡群	木器槽	1	6世紀	〃
通り古墳群	土師器	3	4世紀	〃
	刀子	1	〃	〃
	玉類	一連	〃	〃
	土製経筒	1	14世紀	〃
蔵ヶ崎遺跡	弥生土器片	一括	前3世紀	〃
	炭化米・種子	一括	〃	〃
	矢板・杭	2	前1世紀	〃
高田山古墳群・経塚	須恵器	1	5世紀	〃
	青白磁	3	13世紀	〃
	土製経筒	1	〃	〃
	須恵質甕	1	〃	〃
	北宋銭	5	〃	〃
青野西遺跡	弥生土器	4	前1世紀	綾部市教育委員会
小谷17号墳	須恵器	6	6世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	土師器	2	〃	〃
	玉類	一連	〃	〃
	鉄鏃	2	〃	〃
	刀子	1	〃	〃
	鉄鎌	1	〃	〃
	鉄斧	1	〃	〃
	辻金具	2	〃	〃
池尻遺跡	須恵器	8	8世紀	〃
	軒平瓦	1	〃	〃
平安京跡	フイゴ羽口	1	14世紀	京都文化博物館
	坩堝	1	〃	〃
	鋳型	3	〃	〃
	銅滓	一括	〃	〃
	志野皿	1	〃	〃
聚楽第跡	金箔瓦	9	〃	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	文字瓦	1	〃	〃

遺跡名	遺物名	点数	時代	保管者
長岡京跡左京第265・277次	軒丸瓦	3	8世紀	向日市埋蔵文化財センター
	軒平瓦	3	〃	〃
	柱根	3	〃	〃
	墨書土器	2	〃	〃
	刻印平瓦	1	〃	〃
	丸瓦	1	〃	〃
長岡宮跡第259次	蹄脚硯	1	〃	〃
長岡京跡右京第365次	軒平瓦	2	〃	長岡京市埋蔵文化財センター
	須恵器硯	2	〃	〃
	須恵器	2	〃	〃
	土師器	4	〃	〃
	墨書土器	2	〃	〃
	灰釉陶器	1	〃	〃
勝龍寺城跡	土師器	3	13世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	瓦器	1	〃	〃
	瓦質土器	2	〃	〃
下植野南遺跡	素文鏡	1	6世紀	〃
	須恵器	5	〃	〃
	土師器	4	〃	〃
	滑石製臼玉	二連	〃	〃
百々遺跡	白磁四耳壺	1	10世紀	〃
	銭貨	14	8～10世紀	〃
	鉈尾金具	1	〃	〃
旦椋遺跡	須恵器	5	6世紀	宇治市教育委員会
	土師器	1	〃	〃
	円筒埴輪	2	〃	〃
二子塚古墳	ナイフ形石器	1	2万年前	〃
横道遺跡	朝顔形埴輪	1	5世紀	城陽市教育委員会
	円筒埴輪	1	〃	〃
	土師器	1	〃	〃
瀬後谷窯跡群	緑釉瓦塔（堂）	一括	8世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	軒瓦	2	〃	〃
	和銅銭圧痕土器	2	〃	〃
西山古墓	鉄板（墓誌）	2	8～9世紀	〃
	鉄釘	4	〃	〃
樋ノ口遺跡	軒丸瓦	2	8世紀	〃
	軒平瓦	2	〃	〃
	二彩陶器・瓦	3	〃	〃
	三彩陶器	1	〃	〃
	灰釉陶器	1	〃	〃
	緑釉陶器	1	〃	〃
	須恵器	1	〃	〃
	羊（竜）頭硯	1	〃	〃
瓦谷古墳	革綴短甲・冑	一領	4世紀	〃
	蓋形埴輪	1	〃	〃

第10回 小さな展覧会 京都発掘'92 発行日／1992年8月15日
編集・発行／財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 〒617 向日市寺戸町南垣内40－3 ☎075－933－3877 印刷／三星商事印刷

主 催 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
後 援 京都府教育委員会 協 賛 向日市文化資料館